

序 千 宗室 3

◆ 冬

- 除夜釜——大みそか、新年へ炉の火継ぐ 8
- 梅の井——寅の刻、若水で練る大福茶 11
- 初釜——濃茶で初春を祝う 14
- 初釜——茶席にのぞく「猿」 17
- 好みと職人——茶人の感性にも新たな風 22
- 大炉——冬はいかにも暖かに 25
- 又新——早春に匂い立つ紅白梅 28
- 今日庵——宗旦が好んだ究極の茶室 31
- 楽茶碗——利休の生きざま、理想を「語る」 34
- 利休忌——菜の花手向け「茶聖」しのぶ 37

◆ 春

- 都をどり——凜と一服 先見のもてなし 42
- 花見帰り——桜を用いず余韻を満たす 45
- 寒雲亭と桜——風情のなかの哀れ 48
- 学ぶ——内外から集う若者たち 51
- 透木釜——火を遠ざける心遣い 56
- 継承——厳かに濃茶と薄茶奉納 59
- 礼儀作法——茶の心を通して学ぶ 62
- 竹の秋——茶席に清廉な美しさ 65
- 常叟三百年忌——先祖の精神思い起こす 68
- 葵祭——わびの中に華やかさ 71

◆ 夏

- 乞巧奠と葉蓋——自由な発想で涼しさ演出 76
- 夏の菓子——夏はいかにも涼しく 79
- 名水点——感謝の心、点前で表現 82
- 七事式——式作法披露し先達を供養 85
- 祇園祭——風流凝らす「月鉾」 90
- 修行——十を知り一に返る 93
- 湿灰作り——もてなしの心伝える 96
- 朝茶事——すべては「おいしく飲む」ために 99
- 朝茶事——懐石は客への心遣い 102
- 朝茶事——蹲踞で心も清め 105

◆ 秋

- 和親棚——新しい茶の湯スタイル 110
- 名残の茶事——「不揃い」にわびの風情 113
- 陰陽五行——茶道の根本に色濃く反映 116
- 藁灰——黒と赤 極わびの世界 119
- 御釜師——朽ちゆくものの「美」 124
- 炉開き——「茶人の正月」新茶で迎え 127
- 宗旦忌——家元自ら新茶改め 130
- 口切——緑鮮やか、香り豊かに 133
- 錦繡——茶庭彩る「宗旦銀杏」 136

あとがき 140